

多喜二の半生たどろう

あす小樽でツアー



ガイドマップを手に多喜二ゆかりの地を下見する古沢さん（右）ら実行委メンバー＝小樽運河・北浜橋

【小樽】幼少から青年時代を小樽で過ごしたプロレタリア作家小林多喜二（1903～33年）の追悼行事を行っている小樽多喜二祭実行委員会（21人）が、小樽市内の多喜二ゆかりの地の案内を始める。多喜二没後85周年記念で今年2月に発行したガイドマップ「多喜二と小樽」を見た人から現地案内の要望が寄せられた。初のガイドツアーが16日にあり、道内外の約100人が参加する。

ガイドマップは1部100円で、多喜二が小説「蟹工船」を書く際に情報源にしていた海上生活者新聞社の跡地や、小説「工場細胞」のモデルになった北海製缶の工場など30カ所を紹介。16日の初ツアーでは、実行委事務局次長の古沢勝則さん（72）ら2人が、4時間かけて各地を案内する。7月1日には、東京の演劇鑑賞サークル20人をガイドするツアーも予定。実行委メンバーはガイド力向上のため、ツアーする場所を下見するなど準備を進めてきた。

3回目以降のガイドツアーについては、実行委メンバーのスケジュールに応じて検討する。問い合わせは実行委事務局長の大地蔵さん ☎0880・6099・1815へ。（徳留弥生）

多喜二の創作 原点巡る

小樽 道内外の70人参加



小林多喜二にゆかりの場所を巡った参加者

プロレタリア作家小林多喜二（1903～33年）の足跡を知るツアーが16日、小樽市内で行われ、道内外から約70人が参加した。市民らで構成する小樽多喜二祭実行委員会が企画。同委員会が2月に発行したガイドマップ「多喜二と小樽」を見た人から要望があり、初めて開いた。ツアーでは、海上生活者新聞の跡地を訪れた。案内役の鎗水孝雄さん（76）は「ここで蟹工船に乗る労働者の悲惨な状況を聞き、小説の執筆を決めた」と説明した。大分県から参加した川路潔さん（52）は「小樽の地を歩いたことで、小説を読んで感じた世界と結びつけることができた」と話した。（前野貴大）

ツアーでは、海上生活者新聞の跡地を訪れた。案内役の鎗水孝雄さん（76）は「ここで蟹工船に乗る労働者の悲惨な状況を聞き、小説の執筆を決めた」と説明した。大分県から参加した川路潔さん（52）は「小樽の地を歩いたことで、小説を読んで感じた世界と結びつけることができた」と話した。（前野貴大）